事件の真実

塩沢敬之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
事件の真実

【Ｎコード】
Ｎ６１２４Ｇ

【作者名】
塩沢敬之

【あらすじ】
１９６５年、３月１４日。横浜市の銀行で起きた強盗事件。犯人は二人組。盗まれた現金は一億円。高校生の咲は映画館で一人の少年と出会う。そして、咲の心に渦巻く「事件の真実」とは？

第一章～第三章

プロローグ

１９６５年、３月１４日。
神奈川県横浜市にある横内銀行で強盗事件が起きた。
犯人は二人組で、一人は１７５センチぐらいの細みの男。もう一人は・・・

事件の主要

日時：１９６５年３月１４日　午後１時。
現場：横内銀行桜木町支店。
当時の状況：銀行員は支店長を含む８人。客として１５人の人間がいた。午後１時６分に１１０番通報。午後１時１５分にパトカー３台、警察官１０人が到着。しかし、犯人は逃げた後だった。怪我人０人。盗まれたお金は当時で１億円だった。

第１章

横浜駅、東海道線ホーム。私はかれこれ３０分ほどホームの先端部分に立っていた。いつでも行ける準備は出来ている。だが、なかなか足が踏み出せない。足を黄色の線の外側に出しては電車が来るたびに後ろに引いていた。
「今日じゃなくてもいいか」
私は周りに聞こえない様に呟いて電車に乗った。
　１０数分、電車に揺られながら大船駅に着いたのは夕暮れを過ぎた７時頃だった。私はまだ家には帰らず、駅の近くにある友寄書店に向かった。
「咲ちゃん、またこんなに遅くに来て、親御さん心配するんじゃないの？」

「大丈夫だよ。門限9時だもん。それに友寄さんの所に居たっていえば全然、気にしないよ」
そう言うと友寄さんは自宅がある奥に引っ込んでいった。友寄さんは６０代ぐらいのおじいさんで、元々、母親が読書が趣味だったので小さい頃からよく連れてこられていた縁もあり、私は学校が終わってから大体の時間をここの友寄書店で過ごしていた。漫画や雑誌が立ち読みし放題で、なおかつ友寄さんがお茶を入れてくれるので、私は何時間でもここに入れる事が出来た。
　そして、ここに着て一時間ぐらいたった頃、４冊ほど漫画を読み終えた私は次は小説を読もうと小説が並んでいる上にある棚に手を伸ばした。だが、私の身長では背伸びをしても届かない。踏み台を探し出して棚と同じ高さになった私は一冊の本が目に入った。
「事件の真実」
そう書かれていたタイトルになぜか惹かれた私は本を手に取り読み始めた。本の内容は、恋人同士の二人が強盗事件を起こすというもの。
「馬鹿らしい」
私は呟いた。
恋の為に犯罪を起こすなんて信じられないし、現実的でもない。いや、現実では多いのかもしれないが、他人と接することを拒んでいた私は、たかが恋の為に犯罪を起こす人間なんて馬鹿にしか思えなかった。
　すっかり読書気分ではなくなってしまった。
「友寄さん。私、帰るね」
友寄さんの小さい声の返事を聞きながら、私は友寄書店を出て家に向かった。

第二章

家の玄関の前まで来た私は新聞と手紙がまだ残っているのを確

認した。ならば気を病むこともない。私はただいまと小さい声をだして玄関を開けた。
「こんなに遅くまで何してたの？」
すぐに母親が聞いてきた。
「友寄さんのところ」
「またかい？友寄さんにも悪いから、たまには真っ直ぐ家に帰ってきなさい」
返事をしないで私は二階にある自分の部屋に向かった。
制服を脱ぎ、家着に着替えた私はレコードを聴きながら眠りに就こうとした。だが、父親が帰ってきたのだろう、下の階が騒がしくなった。私はこの夫婦喧嘩を聞くのが大嫌いだった。愛し合って結婚してもこんな喧嘩を毎日繰り返す生活なら、私は他人と結婚しようとは思わない。父親と私は血がつながっている、母親と私も血がつながっている。父親と母親は血がつながっていない。所詮は他人なのだ。私はよく分からない英語の歌が流れるレコードの音量を上げて眠りについた。
朝、高校に行く為に母親が作った朝食を食べていた。父親はいつも私よりも早く出かけるためもういない。私もほとんど会話をしないで出掛けた。相変わらず学校の授業はつまらない。教科書に目を通してるふりをして今日こそはと考えていた。
学校が終わり、駅までの帰り道を歩いていると映画館のポスターが変わっていた。今日から上映の作品が変わるらしい。そこに、昨日手にした本と同じタイトルを見つけた。
「事件の真実」
私は驚いた。どうやらあの本を映画化したものらしい。世間はこんな作品を見たがっているのだろうか？少し興味はあった。もちろん期待ではない。どれほどの駄作かを見てみたいのだ。映画を観るお金なら出してくれるだろう。ならば明日にでも観るか。
横浜駅では映画のこともあり、すぐに電車に乗ってしまった。そういえば明日は私の嫌いな休日だ。休日は人込みが嫌で、ほとん

ど家に居るのだが、まあ、いいだろう。私は家に着いてからは昨日と同じ行動をして眠りについた。

第三章

翌朝、私は朝食も取らずに家を出た。横浜駅について映画館へ向かう。学校の帰りに通る時はまったく人の気配がないのだが、やはり休日だけあって映画館は混んでいた。チケットを買って席に着く。後ろから二列目の端の席。私の隣の席以外は人が座っている。隣の人は遅れてくるのだろうか？映画が始まってから来られたら正直迷惑だが、もしかしたら来ないかもしれない。ちょっと嬉しいが、私の読みは見事に外れ、案の定、映画が始まって１０分ぐらいで隣の席の客が来た。

「すいません」

そう言って私の前を通ったのは私と同じぐらいの年の青年だった。

映画は私の予想を覆してとても面白かった。

何よりも私の興味を引いたのは、この事件が時効を迎えた今現在（１９８３年）に至っても犯人が分からず、一億円の行方も分かっていないという事だった。

一昨日、友寄さんのところで本を読んだ時はバカバカしいと思い、途中で読むのをやめてしまったが、今、映画を観た私はこの作品にとても興味を持っていた。

映画ではどうしてもカットされている部分が出てくる。原作を読みたいと思った私はすぐに友寄書店に向かった。

友寄書店に着き、「事件の真実」が置いてある棚の前に向かった。だが、その本を手にしている先客がいた。

「あれ、あなたは？」

ついさっき、見た顔だった。そうだ！映画館で遅れてきた隣の席の青年だ！

「あの、何か？」

不思議そうに私を見ている青年の後ろから、友寄さんが現れた。
「おや、咲ちゃん。今日も来たの？」
「こんにちは。友寄さん」
私が挨拶すると不思議そうに私を見ていた青年の顔が緩んだ。
「ああ何だ、おじいちゃんの知り合いか」
そう言って青年はまた本に目線を戻した。
「友寄さん、お孫さんがいたの？」
「あれ、言ってなかったかい？」
遅れてきた迷惑青年は友寄さんの孫だった。友寄さんに孫がいる事を知らなかった私は少し驚いたが、今は青年が持っている本がどうしても読みたかった。
「友寄さん、お孫さんが読んでる本を私、買いに来たんだけど」
「そうなのかい？そりゃあすまなかったね。信之、お客さんが来たから、本を読むのやめな」
「え、俺もこの本を買いに来たんだよ」
「お客さんが優先だよ。また取り寄せてやるから」
友寄さんとお孫さんの雰囲気が少し悪くなるのを感じた。
「あの、さっき横浜の映画館でこの作品を観てましたよね？」
私は言った。
「え、何で知ってるの？」
「私もさっき、その本の映画を観に行って、あなたが私の隣に座ったんです。遅れてきたからよく覚えてて」
青年の顔がまた緩んだ。
「映画を観たってことは、君もこの事件に興味があるの？」
青年はすごく嬉しそうに聞いてきた。
「ええ、まあ」
「僕もすごくこの事件に興味があって、犯人が誰なのかや犯行を起こした理由がどうしても気になるんだよね」
「そうなんですか」
「知ってる？この事件が、ここの近くの桜木町で起こった事件だっ

て」
知らなかった私は驚いた。桜木町と言えば横浜のすぐ隣りである。こんな近くで起きた事件だったなんて。
「僕ね。明日、行ってみようと思うんだよね。犯行現場に」
「犯行現場、知ってるんですか？」
「調べたんだよ。図書館とかでね。横内銀行桜木町支店。今もまだ同じ場所にあるらしいんだ」
「君も気にならない？」
私はただ物語を読もうとしただけで、実際の事件を調べようとは思っていなかった。でも、青年の話を聞いているうちに、私は犯人を知りたいと思った。
「私も明日、一緒に行っていいですか？」
青年は少し驚いた顔をしたが、すぐに顔が緩んだ。
「いいよ。二人で犯人を見つけよう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6124g/

事件の真実

2010年10月28日03時13分発行